

# 収蔵作家・山田實の人物像について

---

石田哲朗

東京都写真美術館 学芸員

# 収蔵作家・山田實の人物像 について

石田哲朗

山田實（1918-2017）は戦後沖縄写真の第一世代を代表する写真家である。彼はアメリカ統治時代から本土復帰までの激動の時代において、人々の生活や子供たちの姿を見つめ続けた。しかしその足跡をたどり、彼自身の人物に触れてみると、山田實という人が単なる一人の写真家である以上に、より多面的な意味と人を惹きつける力を持った存在として浮かび上がってくる。以下ではその多面性について取り上げつつ、山田實の人物像を描出してみたい。

まず彼自身が20世紀という時代の貴重な証言者である。山田は1918年兵庫県に生まれた。山田一族は旧那覇市東町に居を構えて商売を営んでいた琉球士族の家系である。2歳の時に一家で那覇に移転、幼少期から少年期までそこで暮らした。1936年旧制中学校卒業後、大学進学のため上京。1938年明治大学に入学、専門部商科で学ぶ傍らで大学新聞の編集委員を3年間務め、プロレタリア文学やジャーナリズムに触れる。東京での大学生活が彼の人生に大きな影響を与えた。1941年日産土木に入社、満州勤務となる。1944年召集令状を受け、関東軍に入隊。1945年満州で終戦をむかえ、シベリア抑留生活を送る。1947年に解放され本土へ復員。1952年に那覇へ帰郷、「山田写真機店」を開業した。以降、本土復帰から昭和後期、平成時代を通してカメラ店経営者として、またアマチュア写真家として活動する。時代の証言者として山田が体験してきたことについては、彼自身の言葉で語られた文章をまとまった形で読むことができる<sup>❖1</sup>。

次に沖縄写真史、戦後日本写真史における山田實について述べたい。彼はカメラの普及と写真文化の振興、本土写真家と沖縄の交流窓口、コーディネーターの役割といった実に多彩な仕事を行った。批評家・仲里効によれば「写真家集団のネットワークのキーマン<sup>❖2</sup>」である。沖縄写真の黎明期において、山田は常に写真を志す人たちの集まりの中心にいた。1956年沖縄タイムス社が毎年開催していた公募美術展「沖展」に写真部門が新設されると、山田写真機店は出品用の写真現像を数多く引き受け、アマチュア写真家の作品制作に貢献した。山田は1958年に本土で戦前から活動する美術団体「二科会」沖縄支部の結成メンバーとなり、1959年にはニコンのカメラ愛好者による「沖縄ニッコールクラブ」の会長に就任した。

また山田の活動の中でも特によく知られているのは、本土写真家

❖1 山田實のまとまったインタビューとしては、主に以下を参照。仲里効、丑番直子、平田利恵子編「山田實クロニクル 沖縄と写真と私」「時の謠 人の譜 街の紋 山田實・写真50年」実行委員会、2006年。琉球新報社編「山田實が見た戦後沖縄」琉球新報社、2012年。「山田實インタビュー 自作を語る」「山田實展 人と時の往来」図録、沖縄県立博物館・美術館、2012年。

❖2 仲里効「はじめに」仲里、丑番、平田編、前掲書、p.1

が沖縄に来訪する際の「身元引受人」や案内役を務めたことである。本土復帰前、米軍統治下の沖縄は本土民間人が自由に渡航することができず、現地を訪れるには必ず「身元引受人」を立てる必要があった。引受人はその人物を保証し、もしもの場合は責任を取る役割であった。職業写真家の訪沖に対して治安当局が目を光らせていた時代である。1960年代『アサヒカメラ』編集部からの依頼で、林忠彦、木村伊兵衛、東松照明らの身元引受人となり、案内役として取材に同行するだけでなく時には撮影助手を務めることもあった。山田が案内役を務めた来沖写真家には岩宮武二、濱谷浩、大竹省二などがいる。画家の東郷青児にはモデル写生のために山田写真機店の2階を提供した。1966年には久高島の秘祭「イザイホー」を取材するために来た前衛芸術家の岡本太郎にも同行した。本土復帰後の1974年、東松照明、細江英公、森山大道、荒木経惟、深瀬昌久の5人の講師による沖縄での「WORKSHOP 写真学校」の開催にあたっては、山田が参加申込窓口を引き受けた。6日間連続のワークショップで定員30名、参加費は3万円という当時としては高額であったが、定員はすぐに埋まり、参加者の一部はベテラン写真家もいたが、大半は20-30代の若者であったという。写真史家の金子隆一は、本土復帰前後におけるこうした山田の役割について、本土の写真家と沖縄のアマチュア写真家たちとの交流を仲立ちする「メディア的存在」であったと述べている。

❖3 琉球新報社編、前掲書、p.236

❖4 金子隆一「山田實と本土の写真家たち」『山田實展 人と時の往来』図録、沖縄県立博物館・美術館、2012年、p.218

写真家としての山田はアマチュア写真家であった。彼が独学で写真を学んだのは、1952年那覇に帰郷して写真機店を開業した後である。「そのころはまだ写真を始めたばかりで、何を撮っていいかわからないし、写真の基礎もないので、本土から取り寄せるカメラ雑誌だけが頼りだった」という。特に写真雑誌『カメラ』で土門拳、木村伊兵衛が審査員を務める月例（アマチュア写真家向けコンテスト）の写真批評を読むことが「唯一の写真の勉強方法だった」。山田は「人間の喜びや悲しみをありのままに表現するリアリズム」という土門のリアリズム写真の影響を強く受けた。しかし山田が子供たちや貧しい人たちにカメラを向けたのは、単にカメラ雑誌で読んだ土門の言葉に影響されただけではなく、土門の触発を受けてそれまでの人生経験で培われた関心事が明確になり、写真家・山田實を方向づけたと見るべきであろう。その後も一貫して彼は人々の生活や子供たちの姿を追い続けた。「これから沖縄はどんどん変わっていく。だから記録に残しておきなさい」、「周囲の普段の生活を撮りなさい」と、沖縄に来た濱谷浩や木村伊兵衛が地元写真家に伝えたという、こうしたメッセージも山田の方向性を後押しするきっかけになった。当時の主流は琉球の伝統衣装を着た女性ポートレートなどいわゆる「サロン写真」であった。人々の生活の記録を「まともに実行したのは僕ぐらいです」と山田は語っている。この時代に沖縄の子供に目を向けた写真家はいなかった。また当時一般的に本土で報道される沖縄の姿が政治闘争に関するものばかりであったことも、山田の写真表現に影響を与えた。「どれもまるで沖縄中がデモ隊で埋められているような報道ばかりで、本当の沖縄の姿を記録しなければいけない、と感じた」。

❖5 琉球新報社編、前掲書、p.173

❖6 同書、pp.200-205

❖7 仲里、丑番、平田編、前掲書、p.29

❖8 琉球新報社編、前掲書、pp.218-219

2015年に当館では戦後沖縄写真の収蔵作品を充実させる目的で、手始めとしてまず山田實の作品30点を収集した<sup>❖9</sup>。その内容は山田が最も盛んに撮影を行った1960年前後を中心とするスナップショット作品である。鳥居が破壊されたままの波上宮や弾痕が生々しく残る建物の廃墟、再建されたばかりの守礼門、道がまだ舗装されていない公設市場の様子などが写されており、撮影された時代の都市の記憶が刻まれている点でもこれらの作品は貴重である。それとともに、写真には山田が見つめ続けた子供たちの姿と人々の生活が生き生きと記録されている。たとえば山田の最初期の作品の一つ《靴磨きの少年 国際通り》(1956年)【図1】は、こちらに目を向ける少年の視線が印象的な一点で、出会いの一瞬を鮮やかにとらえた作品である。また《塩田で働く少女 与根 豊見城》(1963年)【図2】は、塩工場へ運ぶため砂を集める少女の躍動感あふれる姿が強く記憶に残る一点である。きっちりとした構図やシャッターチャンスの感覚の鋭さからは、師と仰いだ土門拳の教えが単なる知識ではなく、身体化されたものとして山田の写真に息づいていることが感じられる。

山田實がいわゆる「作家」として広く認知されるようになったのは、比較的近年のことである。本土復帰30周年となる2002年、彼は初の写真集『こどもたちのオキナワ 1955-1965』を刊行した<sup>❖10</sup>。2003年には那覇市民ギャラリーで「時の謡 人の譜 街の紋 山田實・写真50年」展、2012年には沖縄県立博物館・美術館で回顧展が開催された。今日ではより多くの人たちが彼の写真に目を向けるようになった一方で、山田自身は生涯「写真の職人という自覚」を持ち続けた<sup>❖11</sup>。

山田實は戦後沖縄の子供たちの姿に何を見出したのだろうか。1947年、シベリアでの抑留生活を生き抜き、本土へ帰還した時に復員船の甲板の上から見た光景を、山田はその後何度も語っている。舞鶴港の棧橋に復員兵を出迎える100人ほどの子供たちと女たちが並び、元気に日の丸を振っていた。収容所で「女、子供はみんな米兵に殺されて日本にはいない」と聞かされて本当だと信じ込んでいた彼にとって、それは終生忘れられない感動の光景であった。1987年沖縄で開催された海邦国体の開会式セレモニーにおいて、山田は見事に舞い踊る子供たちの姿を40年前に舞鶴で見た光景に重ね合わせ、これまでの歩みを振り返った。「戦争ばかりだった私たちの時代が終わる。あの戦後の混乱から沖縄もやっとここまで来た。これまで撮り続けた子どもたちが今、立派な姿で踊っている……子どもたちを撮るのはこれが最後だ、と心に決めた」と山田は述べている<sup>❖12</sup>。ちょうど昭和時代の終わり頃のことである。「自分たちが果たせなかった何か希望というものを、その時代や次の時代に、子どもたちに託したんじゃないですか」。子どもたちの姿を生き生きと写し出した山田の写真の背景には、戦争体験の記憶と沖縄の将来への深い思いを見て取ることができる。

2016年、筆者は戦後の沖縄写真史について現地調査を行う中で、晩年の山田實にインタビューする機会を得た<sup>❖14</sup>。作家が97歳の時である。那覇市街の「山田写真機店」に向かう道すがら、彼が長年暮らしていた界隈を歩いてみた。山田が幼少期から暮らした久米や若



図1  
《靴磨きの少年 国際通り》(1956年)



図2  
《塩田で働く少女 与根 豊見城》(1963年)

❖9 当館収蔵の山田實作品は「TOPコレクション 琉球弧の写真」展(2020年9月29日～11月23日)において全点出品した。

❖10 山田實「こどもたちのオキナワ 1955-1965」池宮商会、2002年。

❖11 仲里、丑番、平田編、前掲書、p.56

❖12 琉球新報社編、前掲書、pp.248-250

❖13 仲里、丑番、平田編、前掲書、p.30

❖14 山田實のインタビュー調査は2016年5月11日に那覇市久米にある山田写真機店にて行った。なお、本稿は公益財団法人ボラ美術振興財団の平成28年度助成「山田實を中心とした占領期の沖縄写真史に関する調査」を受け執筆した。助成対象期間は2016年4月から2017年3月末までであった。助成対象期間後も継続して関連調査を行った。

- ❖15 明倫堂は琉球王朝時代の1714年に開設された国内最初の公立学校であった。沖繩文化社編『よくわかる琉球・沖繩史』沖繩文化社、p.52



図3  
《波の上の鳥居》(1958年)

- ❖16 「ニコン」の英語圏での発音は「ナイコン」。ニコンをはじめ、日本製カメラは沖繩の米兵たちに大変人気があった。



図4  
山田寅氏 山田写真機店にて  
2016年(筆者撮影)

狭、泉崎の一带は古い那覇の中心地で、琉球王朝時代からの諸神を祀る天尊廟地があり、戦前は儒学の祖を祀る孔子廟内の「明倫堂」に幼少期の山田が通った小学校があった。その由緒ある学校の前には久茂地川が流れ、美しい石造りのアーチ橋・泉崎橋がかかっていた。泉崎橋は葛飾北斎が《琉球八景 泉崎夜月》に描いたように月見の名所として広く知られていた。橋から海に向かって真っ直ぐに続く久米大通りを歩けば、王朝時代から「当国第一の神社」として崇敬されてきた波上宮へと至る。1945年天尊廟地や明倫堂、泉崎橋といった歴史遺産は沖繩戦の戦火によって焼失、破壊され、この古い地域にあった信仰や文化の豊かさと調和はほとんど全て失われてしまった。山田が戦後に写真家として歩み始めた頃に撮影した《波の上の鳥居》(1958年)【図3】のような生々しい戦火の傷跡を残す町の姿は、その時から半世紀以上も経った今日では見ることはできない。しかし実際にこの場所を歩き、戦前にこの地域にあったはずの調和的な世界と、その対極にある破壊された波上宮の虚無的な景色との間に生じた大きな断絶に思いを寄せてみれば、変わり果てた故郷の現実を見つめることから写真を始めた山田の切実な思いの一端がうかがい知られる。

久米大通りに面した山田写真機店は、今日では時代の流れの中でカメラ販売も写真現像もやめてしまったが、写真愛好者たちが集い、山田の話聞きに来る人たちが交流する場所になっていた。ニコンの沖繩総代理店であった時代の名残で、ロゴマークが大きく掲げられた店頭ショーウィンドウには、山田の代表作が写真パネルになって飾られていた。

高齢の作家にあまり負担をかけないように、インタビューでの発言の多くは、仕事を手伝っている親族の山田勉氏が補佐する形ではあったが、それでも戦後沖繩について、写真について、作家本人から貴重な話の数々を伺うことができた。国際通りにまだ建物がほとんどない頃、舗装されていない道路は雨が降ると泥まみれで大変だったこと。本土の名だたる写真家を案内した時の話。ベトナム戦争の時、出征直前のアメリカ兵たちが必死でカメラを買い求めて、口々に「ナイコン、ナイコン」と言って、深夜も店に押しかけてきた話……。甲高くしわがれた声で語る話の一つひとつが当事者にしかできない時代の証言であった。また穏やかな口調の中にも、厳しい時代を体験してきた強さをうかがい知ることができた。今にしてみれば、平成時代の終わり頃に直接出会うことのできた山田寅は、沖繩と写真について語る事ができる最も古い世代のインフォーマント(語り部)であった。

インタビューが終わり店を辞する時、ふと入り口のガラス扉にある店名看板が目に留まった。それは「山田写真 店」とあり、「機」の一文字が抜かしてあった【図4】。理由はカメラ商売をやめたという実質的な意味からだが、店名の文字を一字だけ剥がすが、それ以外はそのまま残すやり方には、時流に合わせて柔軟に変化しても本質の部分は変わらない心意気のようなものと少しのユーモアが感じられ、多くの時代を生き抜いてきた山田寅らしさが表れているかのようであった。